

CBI（内容中心教授法）の基礎と応用

秋田県立大学 高橋 守

1. はじめに

読者の皆さんは、どのような授業をしておられるだろうか。伝統的な英語の授業で使われる教科書には、言葉を文法項目などの人工的なルールに従って並べて、配置したものが多く、訳読授業をしないと、生徒の反応が、はっきりしないと日頃感じておられる方もあるだろう。諸々の結果として、個々の単語を訳す事はできるが、文全体の意味がさっぱりわからないという生徒を、私たちは何人も目にしてきた。ではどうしたら良いのだろうか。過去数十年間に、英語教育の研究者たちは、私たちの教室を良い方向へ変化させるために、様々なものを提供してきた。CBI(Content-Based Instruction 内容中心教授法)も、これらの新しい教授法モデルの1つである。CBIは、学生同士の授業中の対話を、機械的ではない、本当の意味の伴ったものに変え、英語を話すことが促進されるので、学生たちのコミュニケーション能力が改善する。CBIは、1960年代にカナダのイマージョン(Immersion)教育で用いられた。学校のカリキュラムに従って、行われる授業を全てターゲットとなる目標言語(英語やフランス語など)でおこなうもので、すばらしい成果を出した。続いてアメリカ合衆国の各種ESLの教室で、この教授法が多く使用されるようになり、現在では、日本でも実践する教員が増えている。本稿では、CBIの理論的な背景を紹介し、筆者の授業で、どのようにCBIを実践したか報告する。

2. CBIの基礎：理論的背景

基本的なCBIのモデルは、4つあると考えられる。第1のモデルは、カナダのイマージョン・モデルである。第2のモデルは、シェルタード・モデル(Sheltered Model)とよばれている。イマージョンと同じように、1人の先生が、教科の内容をターゲットの目標言語で教えるのだが、シェルタードすなわち保護されているという意味は、難易度のレベルをESLの学習者に合わせているということである。第3のモデルは、アジャククト・モデル(Adjunct Model)とよばれている。これは、アジャククトすなわち隣り合ったモデルという名のとおり、教科内容を教える先生と言語を教える先生が、協力しながら、それぞれ別々の時間に授業を行う。第1から第3までのモデルは、日本に居ながら、1人の英語の教員として使用するには、難しいのではないかと、筆者は初めてこれらのモデルのことを、知った時に感じた。その後、CBIが使えるものであると確信したのは、次の第4のモデルの存在に気がついた時であった。第4は、テーマ中心(あるいはトピック中心)モデルとよばれている。これは、語学の教師が、1人でテーマあるいはトピ

ックを中心に授業を組み立てるモデルである。テーマ中心の CBI は、短期間でも長期間でも、自由に授業の組み立てが可能であり、周りを良く見渡せば、実践例も豊富に見つかる。ある日本の大学には、ロックンロールの歴史というテーマの英語の授業も存在しているのである。

Snow(2001)では、CBI の理論的な背景が、コンパクトに紹介されている。それらは、(1)クラッシュのインプット仮説(1984)、(2)スウェインのアウトプット仮説(1993)、(3) ヴィゴツキーの ZPD と内言、(4) グラーベとストローラーの認知心理学的な説明(1997)、である。(1) から (3) は有名なので、説明するまでもないであろう。ここでは (4) について補足する。グラベとストローラーは、CBI のもたらす効果として、幾つか挙げている。それらの効果は、(a) 機械的でなく意味を伴った活動、(b) 自然のコンテキスト、(c) 知識を使う機会、(d) やりがいのある課題、(e) 共同学習、(f) 柔軟性、(g) 学習者中心の教室、である。以下、これらの CBI を使う理由を、順に確認する。(a) 学生たちは、内容を学習している間に、かなりの量の言葉にさらされる。内容を学んでいる時の言語活動は、人工的であったり、無意味であったりするのではない。(b) 学生たちは、コンテキスト化された学習環境の中で話す機会が沢山ある。学習内容が、中心的なテーマに沿ってコンテキスト化されている。雑然とバラバラな内容が、雑然と提示されることはない。(c) 学生たちは、内容に詳しくなるので、学んだ知識を授業で使う機会が増える。(d) 学生たちは、やりがいのある課題に取り組むので、内発的な動機が増す。(e) CBI は、共同学習や実験学習のようなアプローチを使うのに一役買う。また学習方略の指導にも適している。(f) カリキュラムの中に柔軟に溶込ませることができる。(g) 学習者中心の教室にも適している。学生たちは、自分たちで内容や活動を選ぶ機会を多く与えられる。

最近多くの英語教師は、自分たちを言語学的な知識の伝達者ではなく、コミュニケーション能力の促進者とみなすようになってきている。村野井 (2006) によるとコミュニケーション能力には、次の要素が含まれる。(1) 言語能力 (文法、談話、社会言語、機能)、(2) 認知能力、(3) 世界のさまざまな事柄についての知識・考え、(4) 態度・姿勢 (価値観、人間性などを含む)、(5) 方略能力。他方、Stryker and Leaver (1997) によると、内容中心教授法を使う教師は、学生の持っているニーズや動機を引き出し、学生たちに学習のプロセスを体験させ、彼らに自律的な学習の仕方を学ばせる事ができる。このように内容中心教授法の教室では、コミュニケーション能力の獲得が促進される。

Brinton, Snow, and Wesche (2003)では、アメリカの大学の中の ESL コースに在籍する大人の学習者に対して、CBI を用いることの原因が述べられている。それらは、(1) 4 技能が、1つのトピックを通して教えられる、(2) トピックが、様々なタイプの学生の興味をひく、(3) 授業では、アメリカ合衆国での生活に直接関連のある事柄を扱

う、である。アメリカ合衆国で移民として生活している大人の英語学習者にとっては、就職や治安などは、直接的に生活に関わる問題であるが、秋田県における EFL 環境の中では、それらの問題は、大多数の生徒にとっては、熱心に取り組むほどの事柄ではない。しかしここから学ぶべきことは、CBI が、このように学生に適切なテーマ、テキスト、活動を選ばせて、学生たちの興味を刺激することができるということである。

ここまで概観した通り、研究者たちは内容中心教授法を用いることの有効性に関して、理論的な根拠を提供してきた。CBI は、授業において意味のある言葉のやりとりを提供し、コミュニケーション能力を養う手助けをする。CBI の授業は、学生たちが自分たちの学習プロセスを理解するのを、容易にする。学生たちは、学習プロセスを体験して、より自律性の高い学習者になる。一度自律的な学習習慣を獲得すると、学生のコミュニケーション能力は、相乗的に伸びるのである。

3. CBI の応用：実践英語 I の授業

筆者が秋田県立大学で担当してきた実践英語 I のクラスは、初め資格試験対策の授業としてスタートした。授業を担当して間もない頃は、英検 2 級全問題集を教材として使っていた。学生が答えを口頭で言って、それを口頭で直していた。この形式だと、問題の英語に学生たちが触れるのは、予習と授業だけで、あとは期末試験まで復習されることはなかった。また教材に出て来る英文の配列は任意であるため、各々の文がコンテキスト化された情報を提供することはなかった。コンテキストなしだと、内容を記憶に残しておく事が難しくなる。学生たちも爆発的な進歩を遂げたということもなく、ただ単調な授業をこなしているという状態であった。

このような状態を変えようと思い、次の段階ではアクティビティー中心の授業に取り組み始めた。授業では、コミュニケーション活動を取り入れて、英検問題集の割合を徐々に減らして行った。コミュニケーション活動によって、多くの学生たちが、学習にすんなり入ってゆくようになった。学生たちは、前の時よりも教材に興味を示してくれた。しかし、この段階でもまだ一度学んだ言葉を、次回以降にリサイクル使用する機会を学生たちに、与えてはいなかった。まだこの段階では、教材間にコンテキストを与えようとは考えてもみなかったからである。この頃やっていた活動は、(1) スゴロク (学生が恥をかくリスクが低く、流暢さを身につけさせるには良い活動だった)、(2) 英単語の神経衰弱ゲーム (トランプの神経衰弱の要領で単語のカードを取り合う)、(3) グループでのディスカッション、(4) VOA ニュースを使ったポスター作り、(5) 英語の歌、(6) 英語のビデオ、であった。学生たちは、活動がとても気に入ったが、ある学生から、授業に締まりがないと言われた。この学生は、これらの楽しい活動と流暢さを獲得する目標との間に、関係を見い出せなかったようだった。そこで筆者は、これらの

活動を結び合わせるものを、探さなくてはならなかった。

最新の段階では、実践英語Ⅰの授業はテーマ中心になっている。授業のテーマとしては、地球温暖化の問題をとりあげ、すべての授業の活動をこのテーマの下に配置している。次の教材と活動は、2007年度に使ったものである。(1) ゴア元米国副大統領主演の『不都合な真実』(DVD)、(2) 『不都合な真実』の SCRIPT、(3) 学内の教職員および学生へのインタビュー、(4) 図書館とインターネットを使ってCO₂削減のための調査、(5) プレゼンテーションの原稿とビューグラフの作成、(6) プレゼンテーションをおこなう、(7) 学生相互による評価。

この段階では、学生たちは、新しく学んだ言葉を何度も再使用することができた。はじめに、筆者は学生たちに、地球温暖化と直接関連のある身近なトピックを選ぶように指示した。例えば学内で使用されている電気エネルギーの総量はいくらかというようなトピックである。それから次に、必要な情報を得るために、授業後に学内インタビューに行くように指示し、最後に得られた事実を分析・統合して、プレゼンテーションを行わせた。

このように様々な事象をつきあわせて、分析・統合をおこなうというような高次の思考をおこなわせることは、非常に大切であると考えられる。高次の思考をおこなう過程には、学生たちが自分たちで計画を立て、実行し、最後に自分たちのプロジェクトについて振り返るというプロセスが含まれるからである。この計画・実行・反省という過程は、学生たちが自分で何かの学習をおこなう時に、また繰り返して使うことができる。つまり、この繰り返し可能な過程は、自律的学習のパターンを経験させるための、とても良いチャンスなのである。

最終的には、学生たちは二酸化炭素削減のための多くのアイデアを生み出した。次に挙げるのは、アイデアの一部である。(1) カフェテリアで使われている食材の中の地元産の割合、(2) (化石燃料ではない) 自然エネルギー、(3) 省エネの方法、(4) 燃費効率のよい車の運転方法、(5) 無暖房・無冷房住宅、(6) 植林。学生たちには授業がある時には、毎回の授業後に学習日誌をつけさせていた。日誌によれば、ほとんどの学生が、地球温暖化について、これが大変に重要な問題であると書いていた。プレゼンテーションの前の日誌では、多くの学生が不安な気持ちを記していたが、実際のプレゼンテーションからは、全ての学生たちがプレゼンテーションの実行のために、真剣に努力をした跡を見ることができた。

4. 結論

筆者のテーマ中心に改造した授業で、学生たちはプレゼンテーションのトピックを決めるところから、クラスメートの前でプレゼンテーションを行うところまでの、プロセ

スを体験した。授業活動の中には、コーポラティブ・ラーニング（共同学習）、ピア・ティーチング（相互教授）、ピア・エバリュエーション（相互評価）、を取り入れた。このようにして、学生たちは地球温暖化の内容をよく学んだと同時に、意味のあるコンテキストを利用して、言葉をアクティブに学ぶことができた、というのが本稿の結論である。

CBI を実践するにあたり、考慮すべき点について補足しておきたい。

- (1) 人は、人から聞いたことは3割も覚えていないのに、自分で話した内容ならば、8割も覚えていることを、常に忘れないでいただきたい。従って、学生がなるべく沢山英語を話すようにプランニングをすることが、大切である。
- (2) 流暢さを身につけさせるには、難易度を下げなくてはならない。言葉として使えるようにさせるには、学生たちが恐れずに答えられるレベルの素材を使うことが大事である。やる気にさせることができれば、無理をしなくても実力は上昇する。
- (3) 理論と実践を一致させるようにしなくてはならない。先生が理論書で頭を一杯にして、教室に行って独演会をするのは、理論と実践の一致ではないということをお忘れなくいただきたい。
- (4) 英語を教えている人ならば、どのような分野の出身の人でも CBI を使うことができる。自分が今まで面白いと思って取り組んできた勉強のことを思い出していただきたい。内容を学びながら実力がついたのではないだろうか？今度は学生たちが、自身の抱えている必要性和興味に応じて、テーマを決定すればよいのである。
- (5) 本稿の通読後も CBI をまだ直感的に理解できない読者は、*New Ways in Content-Based Instruction* という本を購入して、それぞれの授業に合う教案を探し、授業で試していただきたい。授業で今までやったことのないことを、積極的に実行することによってこそ、授業も学生のレベルも飛躍的に改善するのである。

参考文献

Brinton, D.M., Master, P (1997). *New Ways in Content-Based Instruction*. Alexandria, VA:

TESOL.

Brinton, D.M., Snow, M.A., Wesche, M. (2003). *Content-Based Second*

Language Instruction. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Muranoi, H. (2006) *SLA Research and Second Language Learning and Teaching*. Tokyo:

Taishukan (村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』
(大修館書店))

- Stryker, S.B., & Leaver, B.L. (Eds.). (1997). *Content-Based Instruction in Foreign Language Education: Models and Methods*. Washington D.C.: Georgetown University Press.
- Snow, M.A. & Brinton, D.M. (Eds.). (1997). *The Content-Based Classroom*. New York: Longman.
- Snow, M.A.(2001). Content-Based and Immersion Models for Second and Foreign Language Teaching. In M. Celce-Murcia (Ed.), *Teaching English as a Second or Foreign Language*. (pp. 303-318). Boston: Heinle & Heile.